

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
 カトリック仙台司教区事務局
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
 義援金振替口座：02260-9-2305
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

今回はまず、福島の子供のために大阪大司教区神戸地区の方々が行っている「ふっこうのかけ橋」プロジェクトについてご紹介します。また、4月に行われた八木山教会オリーブの会主催の「お花見会」にご支援・ご参加くださったカトリック田園調布教会とカトリック五井教会の方からご報告をいただきましたので、ご紹介させていただきます。

一つの小教区教会の力だけではなく、被災地の人々は全国各地の人々から支えられていることを感じます。

「ふっこうのかけ橋」プロジェクト

ふっこうのかけ橋実行委員会

実行委員長 橋本 直人

2011年11月、東日本大震災の被災地支援を模索していた神戸地区の青年たちは、六甲教会で開催されたテゼ祈りの集い“被災地にとどけ、心の歌声”で東日本の回復を祈りました。

ご存じのように、神戸は19年前の阪神淡路大震災の被災地であり、その時、本当に多くの救いの手を差し伸べていただいた地域として、じっとはしていられない思いを抱えていましたが、あまりにも遠く、Face to Faceで触れ合える支援に結びつくことができませんでした。

そこへ直接、福島に暮らし続けている母子と繋がりのあった当時の神戸地区長、片柳弘史神父（六甲教会）からの呼びかけがあり、模索していた青年たちを中心に、神戸地区全体へ、より具体的な支援の輪が広がって行きました。

一般的に被災地支援というと、被災地へ赴き、具体的な「瓦礫処理」の手伝いであったり、今回は「写真洗浄」や「お茶っこ」などの実働で、「行く」ことにクローズアップされがちですが、「行けない」事情を抱える者にとっては、残念な思いを胸に祈るしかその道はありませんでした。

今回、祈りの集いを通して福島との繋がりが生まれ、直接出会えたことで絆が紡がれ、大きな恵みをいただけたと感謝しています。

特に福島は、福島第一原発の爆発による放射能汚染のため、被災地入りに年齢制限が設けられるなど、制約が支援の道を阻んでいましたが、片柳神父を通して「松木町教会」と「野田町教会」の子どもたちとお母さん方に繋がることができ、ひと時ではありますが、緊張を強いられた生活の全てのことからの解放を願い、保養プログラムを開催しました。名付けて“ふっこうのかけ橋”プロジェクト。

第1回目は2012年8月に開催。それまでは各小教区単位で行われていた夏季キャンプでしたが、福島支援のための合同キャンプに切り替え、小教区のみならず神戸地区内にある複数のカトリック校や修道会、事業体からも大きな協力を得ました。



ふっこうのかけ橋 2012の様子



また地区としては、青年たちがやっていることだと見守るだけではなく、多くの部分の実働を担い、「平和旬間」の取り組みをこのキャンプの中に組み込んで同時開催するなど、この交流によって大きな支援のうねりが生まれ、地区が一丸となる機会が与えられました。約100名の子ども、リーダーは高校生リーダーも含め50名を数え、加えて食事のお世話や祭りの出店からマイクロバスの運転などお手伝いで関わってくださった方を数えると、総勢300名近くの方が関わった大きなキャンプとなりました。

また平和祈願ミサでは、福島の実況についての証言やお母さんからの貴重な生の声を聴くことができ、心に残るキーワードをたくさんいただきました。中でも特に印象深く心に残ったのは、「痛みはたくさんの人と分かち合うと愛に変わる」という言葉でした。

続いて、昨夏行われた2013年『ふっこうのかけ橋』プロジェクトは、同じように夏休みを利用し、小教区が個々に開催する夏季キャンプへの招待となりました。いくつかあるキャンプのプログラムを家族ごとに選ぶことができ、思い思いのキャンプに参加。またお母さん方にはキャンプの間、子どもとは別のプログラムが用意され、ゆっくりと過ごされたのではないかと思います。そしてまた今回のプログラムには、神戸地区のほかに、山口ブロックや大阪の修道会からも支援の声が上がり、協働することで新たな支援の可能性が生まれました。

《ふっこうのかけ橋2013の様子》



「橋」は一方通行ではなく、行き来するために架けられるものであることを念頭に置きながら、『ふっこうのかけ橋』プロジェクトは、福島と神戸の間にかかった『かけ橋』を大切にしていきながら、一年一年「何が必要か」また「何が出来るか」を福島の方々と共に考えながら、また互いの子ども達の成長を見守りながら、これからも歩んでいきたいと思っています。

※今年度も取り組みの準備が着々と進められており、今回は7月末～8月の間に神戸と下関で開催されるそうです。

私たちの思いは桜吹雪に乗って

カトリック田園調布教会 大震災復興支援プロジェクト事務局
今泉 立人

私共カトリック田園調布教会と八木山教会のつながりは震災の年の秋から始まりました。

思えば震災の直前、1月に福祉委員長に任ぜられ、右往左往している最中に起こった大震災、東京も物資の不足でパニック状態の中、委員長からは支援の組織化を命ぜられて立ち上げたのが「大震災復興支援プロジェクト」でした。

震災直後は物資の提供が中心でした。以前より交流のあった東仙台教会を通じて必要なものを細かく指定して頂き、日曜日の会議で支援物資の購入を分担し、数日以内に発送、新たなリクエ

ストを次の日曜日に検討する、という日々が半年は続きました。最初はどろかき用の高圧洗浄機や衛生用品など、四十九日には喪服、夏には盆踊りの浴衣、短い夏が過ぎて冬支度には防寒具、と「義捐金ではなく物資を、迅速に」を合言葉に進めました。その頃は要請に従って主に石巻、塩竈、宮古、そして亶理の4教会を拠点に活動されていた支援組織に援助して参りました。

その過程で地域のレクリエーション協会を通じてボランティア活動を行っていた当教会の青年会と我々プロジェクトが支援をしていた亶理教会の合同企画として仮設住宅や被害のあったご自宅にお住まいの方々を対象とした盛大なお祭り「亶理ふれあいマーケット」を亶理教会にて開催いたしました。この企画を発案したのは我々でしたが、仙台教区の特に県南4教会の皆さんの行動力と企画力で見事に花が咲き、それはそれは大盛況の一日となった事がまるで昨日の事のように鮮やかな記憶として蘇ってまいります。あの日、絶大なお力を発揮して頂いたのが野田和雄さんをはじめとする八木山教会の皆さんだったのでした。

その後も仮設住宅の皆さんに着物を仕立て直しして楽しんで頂く「着物プロジェクト」でつながっていた八木山教会野田さんから震災から1年を迎える頃、お手紙を頂きました。亶理の仮設におられる皆さんを何とかお花見にお連れしたいので資金の援助をお願い出来ないか、というものでした。我々は申し出を受け入れ、お花見は翌年も実施されました。

そして今年、また春を迎えてお花見の季節となりました。が、野田さんのお手紙は少し違う文面でした。「仮設住宅の統廃合が決まり、支え合ってきた住人同士の絆が失われてしまう、今年のお花見はこの絆を確かなものとするための節目の旅になる」そう聞かされて矢も盾もたまらず、心の繋がりを求めて心は集合場所の白石教会に向かっておりました。



亶理ふれあいマーケットの様子



4月15日、東京はすっかり葉桜となり、桜舞散る春の息吹は過去の記憶となっていました。ここ白石は見事な桜吹雪で、参加された皆さん、スタッフの方々の気持ちに寄り添うような見事な演出をしてくれました。ホセ神父とともに歌い踊る人々の笑顔、そして野田さんの口から出た「来年もぜひやりましょう！」の言葉に住民の皆さん、信徒の方々の強い絆が桜吹雪に乗って大きな輪となっていくことを強く感じたのでした。

白石城でのオリーブの会 お花見に参加して

カトリック五井教会 石川 潤子

「仙台行き隊ひと募集！ 今回のミッションは、亘理地区で被災され仮設住宅で暮らす方たちと共にお花見することです」という五井教会のお知らせを見て、今回参加させていただきました。これは聖霊に導かれての参加でした。五井教会からは、シスター菱田さん、神崎理恵さん、そして私の3人がお手伝いに出かけました。

お花見会当日は、早朝にもかかわらず仙台の地下鉄富沢駅までカトリック八木山教会の野田様ご夫妻がお迎えに来てくださいました。お二人はとても温かく、また八木山教会の皆様の温かさにも触れさせていただき、感謝いたしました。バス移動の車中、野田さんから「寄り添いながら明日へ」というお話が熱く語られ、それを聞きながら私は、八木山教会のお一人おひとり皆さんの抱く深い愛に頭が下がる思いでした。

3.11から3年、八木山教会の支援活動も三年目。お花見の準備も事細かに大変でしょうに、そのようなことは一つもおっしゃらず、「明るく寄り添いながら」をモットーに徹していらっしゃる姿に、私はこれまで何をしていたのだ？と、今ごろ初めて知り得て、少し恥ずかしく身が縮む思いでした。また、これまで教会の皆さんが温かなれるのは、やはり信仰によって、天の父、イエス・キリスト、聖霊に導かれていらっしゃる集まりだからだと思いました。また、そのことを深く悟り、この愛に裏打ちされた行動なのだと思います。

お花見の出発前に八木山教会でお祈りをし、白石教会に寄り、ホセ神父様にもお祈りしていただきました。そこから白石城でのお花見となりました。

津波被災に遭われた方から、この三年目のお花見で初めて心から大きな声を出して笑うことが出来ました…と聞かされ、心打られました。心の中の傷は…と祈る思いでした。被災された方の中には、まだお花見に参加する気持ちになれない方々もいらっしゃるというお聞きしました。それでも皆さんぜひということで、八木山教会の方々がドアを叩いてまわり、お連れした方もいらっしゃるということでした。この関わりは、「これからも継続される、していきたい」と語られました。



カトリック白石教会でのひととき

オリーブの会支援のお話を五井教会で聞かせていただいたことは、本当に神様からのお恵みでした。実際に仙台に行き、八木山教会の方々の真摯なまでの温かさに触れて、神様に感謝するとともに八木山の皆様にも感謝しています。

これからもこの関わりを大切にしていきたいと思えます。